

月に對して感有り (三条実美)

山は近く月は遠く月の小なるを覺ゆ

便ち道う此の山月よりも大なりと

若し人眼の大なること天の如くなる有らば

還見ん山は小にして月の更に潤きを

山近月遠覺月小 便道此山大於月  
若人有眼大如天 還見山小月更潤

解説 山を小人に例え、月を大人物に例えて、一見平凡に見える大人物を知る者は、やはり大人物でなければならぬことを述べ、兼ねて人物月旦の通俗に流されることを戒めている。

語釈 ※覺||知覚すること。※便||たやすく。安易に。  
※還||却つて。※更||いうまでもなく。※潤||広いこと。  
人物の度量の大きいことをいう。

通釈 山は近く月は遠いので、月の方が小さく見える。  
そこで、よく考えもせずに、山は月よりも大きい、等と  
安易に断言してしまう。しかし、もし、天のように大きな  
目をもつ人がいたとすれば、かえって、山などは小さく、  
月が大きいことは当然だと思ふであらう。